

## 報告

## 日本リハビリテーション工学協会関西支部 第2回セミナー —みんなで語ろう、車椅子の歴史から見る ひと・もの・くらし—

川村義肢株式会社 建築工房かわむら 林 威智郎

### 1. はじめに

関西のリハ工学分野の活性化と情報交換を目的に、日本リハビリテーション工学協会関西支部と日本福祉のまちづくり学会関西支部の合同セミナーが、昨年11月17日にニチイ学館神戸ポートアイランドセンターにて開催された。参加者は約54名内介助者10名、スタッフ合わせ合計81名。今回は車いすSIGの協力を得て、車椅子の歴史からその技術の移り変わり・時代背景や人々のかかわりなどについて、中村俊哉氏（兵庫県立福祉のまちづくり研究所）の講演をはじめ、日本に現存する歴代の車椅子の展示と、とても内容の濃いセミナーであった。

### 2. 講演について

「車椅子の変遷と車椅子が語る生活」と題して、集められた文献より車椅子の歴史を分かりやすく講演いただいた。

一例として挙げるならば、文献からスペイン王フィリップII世の「車輪付きのいす（1595年）」が車椅子と呼べる最古のものではないかということ。挿絵からの判断で、リクライニング式のいすにキャストが付いたものだろうとのことだった。ルイ14世の車椅子においては、王であるが故、動力源は取り巻きの方だとか。

現代の介助式車椅子と大きく違う点は、進行方向の操作舵取りはあくまで搭乗者である王が行えるようになっていたことである。時代背景により、権力にものを言わせた代物からただ運ぶためだけのものなど、用途や階級制度、戦争などあらゆる背景により様々な形状のものが作られてきた。人の尊厳・社会参加

など、利用者の生活が車椅子に反映されるまでには多くの時間が費やされ、技術の進歩と共に現代の車椅子に至ったことを学べる良い機会となった。



写真1 講演会のようす

### 3. 展示について

展示では籐製・木製の車椅子から、昭憲皇太后が日露戦争での戦傷者に送ったとされる人力自動車椅子、傷兵院で使用されていた箱根式車椅子などをはじめ、国内導入初期のエベレスト&ジェニングス社製クロスバー採用折りたたみ車椅子や国産初期のスタンドアップ車椅子など、歴史を語るにふさわしい介助式・自走式車椅子が17種類。1950年頃から使用されている手動三輪車と同型のものから、エンジン付や電動式の三輪車、モジュール電動車椅子、左右方向含め全方向移動可能な電動車椅子（1980年）など動力付車椅子が11種類。時代背景がうかがえる知恵と技術の粋を結集した展示は、多くの参加者の目を釘付けにしていた。また、それら展示を引き立てるように、車椅子のスペシャリストによる開発時の背景やコンセプト、スポイラー・軸受・溶接の特性など技術面から展示車椅子の構造を解き明かす説明は、気持ちを虜にされた参加者も多かっただろう。

川村義肢株式会社 建築工房かわむら  
〒574-0064 大阪府大東市御領1-12-1



写真2 展示風景

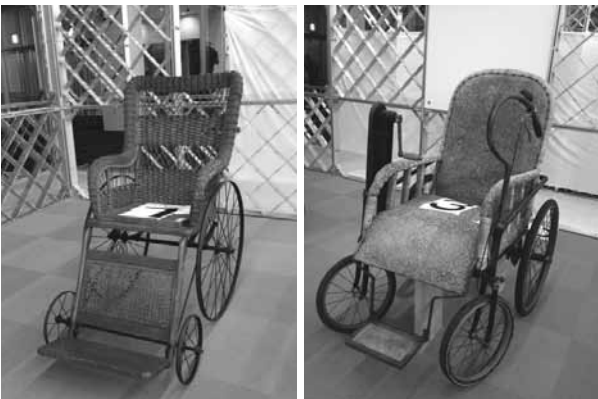


写真3 籐製車椅子

写真4 人力自動車椅子



写真5 展示説明のようす

#### 4. アンケート結果

スタッフと介助者以外の参加者44名に対しアンケートを行った。その結果、33名から回答を得る事ができた。内訳として、講演については無回答2名、「将来の方向性が欲しかった」1名、その他30名からは「時代背景を織り交ぜて車椅子の変遷を講演してくれ大変良かった」などの高評価を頂けた。展示についても無回答2名、その他31名からは「細かな説明があり、当時の技術・機能に触れて大変良かった」や「色々な視点から車椅子を見る事ができ、より興味がわいた」などの高評価であった。

#### 5. おわりに

今回のセミナーは、車いすSIGがこれまでに集めてきた貴重な展示物や資料の集大成と言えるものだったのではないだろうか。展示だけでなく、歴史的背景をふまえた講演があったからこそ貴重な展示が生き、共感を得られたと考える。アンケートの中にも「財産として残す施設を作るべき」という意見があったことから、過去の技術や歴史が今後の車椅子に多くのことをもたらしてくれると実感していただけた結果だと言える。

ただ、残念な事は参加者が車椅子に携わる方々に偏っていたということである。高齢者・障がい者の生命・生活・人生の向上を考える上で、重要なことは多職種の連携だと考える。各職種の専門分野についてはもちろん深い知識と経験が必要であるが、他分野においても興味を持ち情報を交換し合うことこそが、今後使える商品の開発や環境整備に欠かせないと感じている。

バリアフリーという言葉が日常化され、それらを売りに掲げている工務店が無数に存在する昨今。なぜ住環境に欠かせない車椅子などに興味を持ち、その特性や変遷を少しでも知ろうとしないのか。

今後、日本リハビリテーション工学協会の業界に対する責任と期待は多大なるものであると痛感したと共に、私も学びの場であるこれらの展示場を設置していただければと痛切に願う。